

小さな「怪獣たち」とのドラマセラピー

尾上 明代

3. 続く「いじめ」のドラマ

このマガジンでは、被虐待児たちへのドラマセラピー治療について、ある児童養護施設で継続的に行ったセッション事例を連載することにした。主に具体的なストーリーを読むことを通して、ドラマセラピーという「対人援助」法について知っていただければと考え、プロセスを詳述している。

A 児童養護施設で暮らしている 5 人の子どもたち（マツオ君、スギオ君、イチゴちゃん、リンゴちゃん、アンズちゃん）と開始したドラマセラピー。前号では、良いスタートとなった一回目のセッションについて書いた。

今回、報告する二～四回目でも、私の「いじめられ役」が続く展開になったが、ドラマという枠組み、そして役と現実の境界をはっきりつけることが、いかに重要であるかを改めて確認する良い機会となった。

二回目のセッション

リンゴが、いきなりぐずり始めた。お試しセッションのときに受けたおっとりした感じが消えており、ネガティブな気分を周

囲にたくさん投げかけていた。実家に帰って実母と会える機会がなくなっていること、また自分より年下の子どもが入所したことで、一緒に暮らす職員からの注目が、その子どもに行っている状況等が続いており、やはりその影響ではないかと施設職員の浩二さんから聞いた。

私とドラマをしたいというイチゴとどちらが先にやるかでけんかになったが、浩二さんが、「イチゴの方が一つ年上なんだから」とイチゴを説得した。「いつも年が一個上ってだけで、我慢させられるんだからッ!」と、イチゴは強い不満を訴えた。一人一人の子どもの訴えやリクエストを、それぞれ 100%受け入れてあげたいところだが、それはなかなか難しい。やはりできるだけ公平になるよう配慮しながら順番に対応していくしかない。もちろん、グループ内のコンフリクトはグループワークの重要な要素である。しかし、少なくとも連続セッション開始時期の今は、そこには焦点をあてないようにし、ドラマを演じ合う中で、良い相互関係を創るという目的を優先する。

リンゴ（母親役）と私（子ども役）

母親は、子どもを家の外に締め出し、無理やりレバー（彼らにとってレバーは、まづいものの代名詞である）を50コ食べさせながら、自分は家の中で桃を食べている。ドア越しに話している設定。

子ども： 桃とレバーじゃ、天国と地獄じゃん。

母： あんた、地獄に行けば。いいから食べろ！

いじめている、という雰囲気が強く伝わってくる。家には絶対に入れてくれない。今日のリンゴには、大声で怒鳴るようなエネルギーはないのだが、その分、静かで冷たい。私は子ども役として、確実にいじめられていることを感じた。ドラマの雰囲気がシリアスになりすぎないようにコントロールしたかったので、少しユーモラスにしようと思い、子どもがレバーの数をごまかしながら食べる場面にしてみた。ところが母親は、間違いなく食べているかどうか、ちゃんと数えているので、まったく数をごまかせなかった。一皿に盛ってある50コを食べればよいと言ったのに、やっと食べ終わったら、またもう一皿、持ってきた。子どもがいよいよ食べていると、「1万円くれたら許す」などと言う。しかし、当然そんなお金は持っていないので、子どもは、随分たくさんレバーを食べる羽目になった。

イチゴ（母親役）と私（子ども役）

こちらも、おやつにレバーを食べさせる母親だった。当然、前のドラマに影響されて、それを真似することがよく起こる。しかし、単に真似する目的だけではなく、私が望み通り「いじめられ役」を誠実にこな

すので、それを見て自分もやりたいと思ったのだろう。

子ども役が、気持ち悪がりながらも、けなげに一生懸命食べ終わると、イチゴは「あと10皿食べなさい！」と迫ってくる。しかし相手役の私は、リンゴのときよりも、嫌な気分にならなかった。今日のイチゴとのドラマには、劇遊びの雰囲気が少しあった。いじめていても、台詞にそれほど陰がない。つまりイチゴが、「いじめる」感情にどっぷりと支配されずに、そこから少し距離をとって、劇遊びとして楽しんでいる部分を感じたのだ。このようなことは、私自身が相手役を演じているからこそわかるのである。たとえば子ども同士に演じさせて第三者としてドラマを見ていてもわからないことが、「第二者」として関わると、確実に感じることもできるのである。

しかし、プロットの発展や変化はないままだった。そこで、ある程度イチゴが希望通り繰り返したな、と感じたところで一旦終了した。

マツオ（1300歳の怖いおじいさん役）と私（156歳の息子役）

役の設定そのものが、マツオがクリエイティブになってきたことを示している。ほんの短い間であったが、彼が老人になりきった瞬間があり、しかもそれが本当に「おじいさん」らしい上手な演技だったので、全員にとってもウケた。息子役がいじめられるというテーマは同じだったが、内容は、ポテトサラダに毛虫が入っていて、それを息子が食べさせられるというもので、レバーより進化していた！ しかも、ポテトサラダはレバーよりずっとおいしいものという認識をもつ彼が、息子を一瞬喜ばせ、結

局毛虫というレバーよりずっとひどいものを食べさせるという手の混んだストーリーラインも、創造的で良いと思う。

息子は、何とかいじめられることから逃れ、できれば父親と仲良くしたい意図で、「父さん、一緒にお酒でも飲もうよ！」と良い雰囲気誘ってみた。でもおじいさんは、「嫌だ」と舞台の端のイスのところにいままで、寄ってこなかった。しかし、たとえ短い時間であっても、表面の装いと、その真意を二重に表現するような場面作り、老人の役を上手に演じるなど、演技を楽しみ始めたという感じがあり、前よりずっとドラマらしい様相を呈してきたことは進歩だと思う。

スギオ（おじさん役）と私（おじさんが道で拾った 26 歳の男の役）

マツオのドラマに刺激されたスギオも、さらにユニークな配役と筋書きを考えたようだ。とにかく、すべての設定は、本人が提案するものを評価なしにそのまま受け入れる。

男が、道端で拾われるところから開始した。

おじさん：持って帰ってやるよ。

男：嬉しい、いい人だね！（素直に感謝する）

おじさん：こき使ってやる。

やはり、そう来たか……。このあと、おじさんは、トイレの便器に頭をつっこんで来い、とか浩二さんにキスして来い、などと男に命令する。もちろん、ふりだけの演技であるが、男はきちんと従う。すると、「冷蔵庫の下のドアに入っているお酒飲んでいいよ。」と言うので、男がご褒美だと思って喜んで飲むと、「飲んだら死ぬよ。毒が

入ってるから。死んでよ！」という筋書きになった。当然、男は苦しんで死んだ。おじさんは、笑って見ている。このときにスギオから受けた感情は、誰かを殺したいほど憎んでいる、ということではなく、自分のリクエストを他者がその通りに聞いてくれた・自分を全面的に受け入れてくれたことへの愉快的気持ちだったように感じた。お試しセッションのときに「殺し合いをしたい！」と言ったE君（メルマガ第一号に掲載）からは、本気で人を殺したいような雰囲気が伝わってきたが、スギオからは感じられなかった。

男が死んですぐ、観客として見ていた他の子どもたちが、その場面にどやどや入ってきて、男は生き返るよう導かれた。「友情出演（?!）」のつもりなのか、「昔のお母さんとおじいちゃん」などが登場してきて、男は彼らに会うことになった。「観客たち」も、場面作りに一緒に心を配り始めたのである。これは、彼らの自発性が引き出されたことを示している。また、「おじさん」を信じてついて行った男を死なせなくなかった子どもが多かったとも言える。その後は混沌として、ドラマとしての結末で締めくくる形にはならない状態で終わったが、みんなが舞台に登場して男を生き返らせることで、満足した感情になったことが結末、という見方もできる。スギオとしては、「ドラマを演じる」というかたちになっていたという点で、かなり良いものを提供してくれたと思う。

その後、全員で強盗と探偵のドラマごっこを行ったが、前回の家族ドラマのような盛り上がりはなかった。それでも皆は、面白がってやっていたようだ。

「想像」の難しさとヒステリックな笑い

最後にクールダウンのための、想像の世界へ行く時間になる。部屋を暗くして床に寝て、「鳥になったつもりで好きなところに行つて。」という指示をする。でも、私がどこに行つたか聞いても皆ふざけて、前回同様、ウンコの世界、おちんちんの世界、としか答えなかった。そもそも、そのような想像の世界に行っていたとは感じられない返事の仕方だった。もし何かを想像していた子どもがいたとしても、それを皆には伝えなかった、ということかもしれない。それまでの経験から言うと、小学校のクラスでこのワークをすると、子どもたちの反応はとても良かった。しかしこの五人は、この後も「想像の世界に行く」ことが難しい時期が、長く続いた。

今回のセッションでは、彼らがまったく意味なく突然、キャー！！ギャー！！と奇声をあげて叫ぶことが多かった、というのが全体的な印象だ。また、特に女の子3人の笑い方が気になった。前回、イチゴとのドラマの中でも感じたが、今回は3人とも同じようなヒステリックな笑い方をしていた。子どもが、楽しい・面白いと感じたときに出す笑い声とは異質なものだ。いわゆる子ども向けの童話劇か何かで、(大人の俳優が演じる)悪役の魔女が、「いい気味っ！」という感じでヒヒヒヒヒッ！と甲高い声で笑うときのイメージにぴったりだった。そのような笑い声を、ドラマ以外のときにも何度も聞いた。純粋に、ただ楽しいという感情のこもった彼女たちの笑い声を聞いてみたいと思った。そのような笑い声は、その後10ヶ月経った頃によく

聞こえ始めることになるのだが、この時点では、そのような変化がいつ、どのように表れるのか、予測はできなかった。

ドラマという枠組みの効用

この日、私は事情で即座に帰らなければならず、皆でお菓子を食べる時間は、浩二さんに任せることにした。それを告げると「何でえ！？」と皆が不満な顔を見せたので驚く。特にマツオの、えーっ！？ そんなの嫌だ！という表情が印象に残った。浩二さんは、施設の中でも特に人気のある職員で、子どもたちはとにかく彼のことが好きだ。お菓子の時間は、浩二さんが本を読むのを一緒に黙って聞くだけなので、私がいなくてもそれほどの違いはないと思っていたが、そうではなくて、彼らにとっては重要だったというのが、このときにわかり、私が個人として受け入れられていることを感じて嬉しく思った。

また、改めて「構造」としてのセッションの働きに注目させられた。これは、ドラマの中での私への「いじめの感情」が、しっかりドラマの中だけに収められていることを意味している。私たちは、この施設で、いわばセラピストとクライアントという「役」をそれぞれ演じているわけだが、さらにそこで創ったドラマという「劇中劇」で、「お母さんと子ども」「おじさんと若い男」などの「役」を演じていたのであり、その役を降りたあと、お菓子の時間には、またセラピストとクライアントに戻る、ということを経験する構造が、子どもたちにはっきり理解させていた、ということなのだ。

たとえどんなに私をいじめても、それは当然ドラマの中で自分の感情を表現して、

セラピストが演じている「役」の誰かをいじめているのであって、もちろんセラピストをいじめたいわけではない。子どもたちには、「セラピスト」とその彼女が演じている「役」が、はっきり分化・分離して見えている。そして、セッション終了後のお菓子の時間に、私を「セラピストの明代さん」として受け容れる素地ができはじめていたのだった。そのような二重構造が有効に働いているのは、ドラマセラピーとしては当然のことであるとはいえ、改めて発見できたことだった。

しかし、このような役の多重性という単純なことも、ドラマという枠組みがないセラピーでは、よりわかりにくい。逆に、枠組みをきちんと作ると、ドラマの「役」から降りたときに、はっきりとお互いにわかるのである。ここが非常に大切なポイントである。ドラマを使わないセラピーの場合、セラピーと非セラピー状態の境界線は、どのように引かれているのか。これは、言わばプレイ・ルームという場所とセラピーの時間で区切られていると考えられる。しかし、その境界線をクライアントが理解していない場合が多いと感じる。セラピストでさえ、境界があいまいになり、傷つくこともある。例えば子どもにプレイセラピーを行うため、プレイ・ルームに入ってセラピーの時間をともに過ごしているときは、セラピストとクライアントとして過ごすことになり、そこでの遊びの中でクライアントからセラピストへの「攻撃」があった場合、それは当然「セラピー内」でのことである。しかし、その時間が終わり、その部屋を出れば、クライアントの攻撃的な気分はすぐに収束するのだろうか。またセラピストも、「攻撃された」感情をすぐに切り替えられ

るのだろうか。子どもは、いったい誰への攻撃をしたという認識だったのだろうか。このようなとき、セラピーセッションの中でさらに「ドラマの役」という構造が使えると、そのような感情の分離が効果的に、眼に見える形で実行できる。通常発生する転移感情を、ドラマという特別の舞台、特別の時間の中の演技・行動の中に包みこむと同時にそこで大いに「劇的に」解放することが可能となる。もちろん、このことで通常のクライアント・セラピスト間の転移・逆転移がなくなるものではない。しかし、このようなドラマ手法では、(いじめや攻撃的感情の場合は特に) 転移感情の問題から解放された活動が大いにできる。また、その個別のドラマが終了し、役割解除をすれば、本来のセラピスト・クライアントの関係に短時間で戻ることが可能となり、セラピーをよりよく効果的に進めることができると思う。

以下は、マクマホン(2000)が、傷ついた子どもの収容施設で働くワーカーが遊びのセッションをする際の留意事項を述べたものである。

ワーカーは遊びのセッションの中で子どもの気迫に満ちた怒りの感情を受け止めるにつれ、その子への怒りやその子を罰したいという感情を恐れるようになったり、また報復したいと思ったりするかもしれない。あるいはワーカーは、自分自身と環境を子どもの怒りから守るのに忙しいので、その子が伝えようとしているものについてよく考えたりそれに反応したりする精神的な空間を作る機会がないかもしれない。犠牲者が迫害者になってしまうこともある。軽蔑

的な無関心さ、すなわち自分が感じている拒否というコミュニケーションのやり方でワーカーとやりとりする子どもがいる。こうした場合、ワーカーはむなしさ、無力感を感じ、悪影響を受けたとさえ感じる。(p.90)

このようなことは、セラピーの中で（もちろん、相手が大人であっても）起こるが、ドラマという枠組みを使うと効果的に対処できることを、理解していただけたと思う。マクマホン、このようなときの対処法について、次のように言う。

ワーカーが攻撃は個人的なものではなくて、自分を裏切ったと感じている親に対する子どもの感情の再現なのであるということを経験し、思い出すことが有効である。(p.90)

まったくその通りなのであるが、攻撃が激しくなると、どんなに頭でわかっている、セラピストといえども人間なので、感情的に難しいときがある。

英国のドラマセラピーのパイオニアであるスー・ジェニングズ(1990)は、次のようにいう。

ドラマセラピーという方式では、その本質からして、劇の中の劇、さらにその中の劇、というように劇が多重に創り出される。別の言い方をすれば、さまざまな人の人生を抱える世界全体という演劇の場、その中のドラマセラピーグループという場、さらにその中のドラマ、という具合である。(p.25)

つまり彼女は、劇中劇を演じることによ

り、演じる側と観劇する側との双方を多重に理解していくことができる；そのことにより、人のさまざまな本心や真実が開示される局面を作りだすことが可能となる、と言っている。私は、この構造がセラピー中の転移感情を扱う上でも有効だと考える。繰り返すが、セッション中のドラマという劇中劇で演じることにより、転移感情をより強く、より真実に近い、あるいはそれ以上に拡大して表現することが可能となり、それが相手を傷つけることなく、安全に行われるのだ。

実は、私たちの日常生活の中でも、転移感情を本来の相手ではない人に対してぶつける・ぶつけられるという場合が多くあるのだが、お互いそれに気づかずに、人々は傷ついたり苦しんだりしている。普段でも、もしこの劇中劇という枠組みを作れたとしたら、多くの人間関係を良くすることができるのに、と思わずにいられない。

3 回目のセッション

さて、3 回目は、少し趣向を変えてみようと思い、『三つの願い』というお話を導入に使った。貧乏な老夫婦の前に神様が現れ、どんな願いでも三つ叶えてあげよう、というストーリーだ。子どもたちに、何でも希望を言ってもらい、それが叶うドラマを創ろうという意図だった。これまでのセッションで、演じることや仲間とのドラマ創りを多少なりとも楽しむことに慣れてくれたのではないかと考えて試した導入であったが、彼らは楽しくなさそうで、全然乗ってこなかった。あとで思ったのだが、彼らは希望することが不得意なのだ。重要な時期に親との信頼関係が築けなかっただけでなく、多くは見捨てられたという感情を持ち、

セルフ・エスティームが低い状態では、たとえドラマの中でさえ、大きな願いを神様に頼む心境にはなれなかったのだろう。万が一でもいいから、「実のお母さんと会いたい」などの生の気持ちを表現してくれたら、グループで共有・共感したいと思っていた私の期待が甘かったと思う。

それでも私がリードすると、お金がほしいという希望が多かった。前回、レバーを食べさせる母を演じたリングが、「1万円くれたら許す」と言っていたことも考え合わせると、彼らが「せめてお金だけでも、少しあったら」と思う気持ちが理解できる。あまりに自由のない生活、我慢ばかりの生活。子どもらしい夢や希望をもつ気持ちの余裕などあるはずもないのだ。

結局5人きょうだいの劇をやることになった。スギオは大学生。あとの子どもたちは小学生。浩二さんは父、私は母になる。学校からみんなが帰ってきたところという設定で、親たちは、「宿題しなさい！」というが、全員反抗する。一人ずつ私たちに訴えている様子からわかるのは、やはり自分に一番注目してほしいということだった。100%の受容、100%の注目をあげるという意味では、彼ら一人一人に一对一のセラピーが必要だと思う。でもとにかく今回も、彼らは「両親のいる」ドラマを皆で楽しんでくれたのではないかと思う。ただ今日は、そのあと混沌として大騒ぎになり、あまりの大声に、階下で仕事をしていた事情を知らなかった人が、注意をしに来たほどだった。

最後の目を閉じて想像の世界へ行く時間でも、今回はバタバタ動き回るだけで、全員まったく言うこと聞かなかったのが、浩二さんが彼らを強く叱った。彼は私に「こ

の時間だけ、子どもたちみんなが、收拾がつかなくなるんです！」と言っていた。そうであるならば、できるだけそうさせてあげたい。もちろん、ルールが守れずドラマができないほどの混乱になっては困るだが、ある意味ここが「解放される場所」として、子どもたちに正しく受け取られていると言える。できれば、普段我慢ばかりの子どもたちに、ドラマセラピーの場でまで怒ったり制限したくない。いづれにしても、今回は、初めに私が提供した材料（三つの願い）が失敗だった。私にとってはいくつかの発見があったが、セッションの進行としては、少し、行き詰まった感じで終了した。

四回目のセッション

到着してすぐ、スギオがマツオに耳をぶたれて泣き、私が撫でてあげる。スギオには私のケアリングを示す自然なタイミングがなかなか訪れなかったので、良い機会だったと思う。

さて、いつもは最初に必ず円になって、守るべき「約束」(メルマガ第二号参照)を、何とか全員一緒に言わせてからセラピーを開始していたが、今日からその前に毎回、ダンスをすることにした。初めは私が音楽に合わせて適当に踊るのを、皆がまねっこする。あとは、一人ずつ順番に「踊るリーダー」になり、全員でまねっこをする。真似をさせるのは、ミラーイングの効果で皆の気分を合わせる狙いだったが、それぞればらばらな動きを勝手にしていた。でも初めてのダンスを楽しんでくれた。

ドラマは、再び子どもたちの好きな設定でやらせることにした。

イチゴ(子ども)と私(怖いそババア)

私は「宿題しろ！」で始めたが、いつも

と同じようなパターンを抜け出せないかと考え、だんだん怖くしないで仲良く母子で遊ぶという方向にもっていこうと試みた。が、もう一つ相手の反応が悪い。そのうち観客が「全然怖くない！」と訴えるので、「そうか！」と言って彼らの気分に合わせてことにした。その後の流れの中で、くそババアが、「何かリクエストは？」と子どもに聞く場面があったとき、イチゴは、まじめにこう言った。

「消えてほしい、ほんとは死んでほしい。」

つまり「私があんたを殺すんじゃないよ。あんたが自分で死んでくれ」というメッセージである。本当にそういう気分なのか確かめたいのと、気が変わってほしい希望もあって質問してみた。

くそババア： 今、私がウって死んだら嬉しい？

子ども： うん、嬉しい。

くそババア： そのあとどうすんの？一人で生きるの？

子ども： うん。

ふざけている雰囲気は、まるでない。このストーリーを実行する決心は固いようだった。

くそババア： どうやって死んだらいい？

子ども： 包丁もってきて、自分の目ん玉刺すの！

イチゴは、考える間もなく、すぐに答えた。このような発想がどこから来たのかはわからない。ふと、ギリシャ悲劇のエディプス王を思い起こす。自分自身に与える懲罰としては、相当に酷い部類に入ることではないだろうか。それをリクエストしているイチゴは、「くそババア」に対して、それほどの思いを持っているのだろう。私は往生

際が悪く、イチゴが撤回してくれる気分にはならないか、と働きかけてみる。

くそババア： えーっ！？ じゃあ・・・。

私が死んだら悲しい・・・？

イチゴは、煮え切らないで、ごちゃごちゃ言っているくそババアに腹を立てたようだった。

子ども： 早く死ね！（怒鳴る） 死んだらハッピーエンド！（叫ぶ）

くそババア： じゃあ、ハッピーエンドにしてやるよ。

私は、イチゴを受け入れていることを示したかったので、リクエスト通りの筋書きを演じた。まず、両方の手に包丁をもって、「うっ」と目を刺す動作をした。しかし、私が本気で演じたらリアルすぎて、イチゴや他の子どもたちにとって絶対に良くないので、ユーモラスな雰囲気のをしゃべり方を漂わせて、「残虐なドラマです。あ、血が・・・どおおー」とナレーションしながら、目から頬の上を手の指で軽く触った。そして「バタっ」と言いながら倒れて死ぬところを「誠実に」演じた。するとイチゴは、満足したように、最後のナレーションを自分でしゃべってドラマを終わらせた。

子ども： 包丁を持ってきて、切って、焼いて食べました。おわり！

観客の拍手でドラマ終了。このとき、イチゴは何を感じていたのだろうか。この施設では、今まで何度となく「殺された」私であるが、このような具体的で「残虐な」リクエストによって自ら死なされる場面は初めてだった。しかも、バタッと死んだだけで終了ではなく、さらに「包丁で切って焼いて食べられた」のだ。しかし、イチゴが「切って焼いて食べる」アクションはせず、ナレーションだけで筋を説明したの

は、私がリアルになり過ぎないように意図した演技を理解していたからかも知れない。

マツオと私（二人ともプロレスラーの役）

最初はドラマの設定と役がまったく決められずにいたが、結局「プロレスラーとその相手」ということになった。プロレスラー同士だからと考え、私は「試合が終わったら話さないか」とマツオを誘ってみたが、「いやだ」と断られた。

試合が始まった。実際に殴ったりする気配はなく、セラピー初めの約束通り、プロレスの「ふり」だけで、アクションをする。きちんと「ふり」ができてるのは、見事だと思った。そして、私が倒れたところで「1！2！3！」とカウントされ、立ち上がれずに負けて、試合が終わった。勝ったマツオは嬉しそうだった。

私（世界一うざくて臭いゴリラの役）とリンゴ・アンズ（ゴリラをやっつける人の役）

最初にリンゴが出て来て設定を始め、アンズと一緒にやろうと誘った。アンズは一人では、絶対に私とのドラマをしないが、仲間と一緒にだと出て来て参加する。リンゴは私に、「お前がゴリラで私たち二人の人間が殺す」と言う。バナナをあげるよ、とゴリラに渡してすぐ取りあげたり、「臭い！」とか「きもーい！」と言っていじめる。二人で楽しそうにはしゃいでいる。私は二人の満足のために、きちんといじめられ役を演じた。最後は、二人がゴリラを殺したが、ふざけている感じで、イチゴのようなシリアスな雰囲気はない。

次に、二人が「臭いし、まじめすぎていやだ」という女の子（私）を学校でいじめるドラマに移る。今度は、ぶったり（もち

ろん、ぶつ「ふり」だけ。これも毎回「約束」を復唱させている賜物である）、臭いと言ったりする。担任の先生がいないところでいじめるので、陰湿な感じを受ける。私がいじめられて泣いたりすると、二人して「いい気味〜！」という感じでとても嬉しそうにする。

すると、何故かイチゴが、「見てもらえない、放っておけない」という感じで観客席から出て来た。担任の先生になり、ひょうきんな雰囲気のでしゃべり方で私をかばい、いじめっ子に注意する。「あなたたち、いじめてるんでしょー。ダメーよ！」

今日は、「目ん玉刺して死ぬ」ところから始まって、その後もプロレスで倒されたり、友だちにいじめられているばかりの役をしている私は、自分の生身の感情としても救われたような気持ちになり、またイチゴが私の味方の役を買って出たこと自体も嬉しかった。そこで「先生、助けてくれてありがとう」と、嬉し泣きの演技をした。このような、相手の好意を信じて感謝するような場面で、私は今まで何度も「失望」させられて来たのだが、今回のイチゴは、私の信頼を初めて裏切らなかった。イチゴ先生は「また、こういうことがあったら、言ってね！」と言ってくれた。リンゴもアンズも、それ以上はいじめなかったのも、「先生」の「介入」は、奏功したのだ。

先ほどの、目を刺したドラマから私はかなりのインパクトを受けていたので、イチゴが咄嗟に特別出演で、私の味方役をしたことは、どんな意味があるのだろうかと思わずにいられない。前半でネガティブな感情をはき出すことができたので、ハッピーエンドを創ることができる気分になったのかもしれない。

できちゃった結婚の家族ドラマ

後半は、やはり家族のドラマがいい！ということで、みんなで設定する。今回は、できちゃった結婚、ということになる。以下のプロットは、ほとんど子どもたちが創ったものである。

まず浩二さん（父親）と私（母親）が結婚式で指輪の交換をし、キスするところから始まる。みんな「キスして、キスして！」とはやし立てるが、これもやはり「ふり」だけである。イチゴは神父、スギオは私の父役で、新婦の私はスギオと腕を組んでバージンロードを歩く。彼は、照れている酔っぱらいの父を演じている。酔っぱらいの演技がかなり上手くできていて、感心する。あとの子どもは列席者である。式が終わったら、すぐに産気づく母親。イチゴは、いろいろな役を即興でこなせる柔軟性が一番高い。すぐに看護師になり、私のお産の世話をしてくれた。このときも、いじめられている子どもを救った教師と同じような感情で、親切であった。出産が終わると、五人は全員、夫婦の子どもになる。（できちゃった結婚で、結婚式直後に五つ子を生む親もめずらしい。私としても、めったに経験できない役を演じることができた。）

子どもたちのリクエストで、夫婦は五人に名前をつける。「あなた、この子は可愛いですね。何て名前にしましょうか」と二人で、「食いしん坊」「甘えん坊」などと一人ずつ名付けていった。五人とも素直に嬉しそうな表情を見せた。

今日は、前回の「行き詰まり感」から抜け出せた気がする。

（次号に続く）

引用文献

- ① リネット・マクマホン 鈴木聡志訳
（2000） 遊戯療法ハンドブック ブレーン出版
- ② Jennings, S (1990). Dramatherapy with families, groups, and individuals: Waiting in the wings. Jessica Kingsley

